【様式３-１】

公益財団法人 樫の芽会　御中

令和６年度伴走型就学・学習支援活動助成　実施報告書

【団体の概要】		①作成日	令和 7 年 5 月 20 日
②法人・団体名	一般社団法人えんがお		
③団体所在地 （都道府県・市町村名まで）	〒324-0051 栃木県大田原市山の手 1-9-10		
④責任者氏名	濱野将行	（役職名等）	代表理事
⑤担当者氏名	濱野将行	（役職名等）	代表理事

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R06-008	⑦助成金額	100 万円	⑧申請カテゴリー	D
⑨奨学活動名	多世代交流型の、切れ目のない学習支援及び社会的体験ができる居場所づくり事業				
⑩主な実施場所名・及びその住所	栃木県大田原市山の手地区				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式３-２】又は別添資料にて記載・説明ください。）

＜課題＞本事業では、４つの課題に向き合った。①つながりが希薄な世帯、経済的に困難を抱える世帯の学習支援が社会に不足している。②障害特性のある子どもも多く関わっており、専門職を配置した上での個別性の高い学習支援が必要である。③学習面だけではなく、進学・卒業後の伴走支援など切れ目のない支援が重要である。④学習に加え、安心できる人たちとの課外学習などにより社会的体験の貧困に対するアプローチも重要である。

＜内容＞①-③に対しては、専門職を配置した学習支援と相談体制を実施した。学習支援・相談支援は、週に２回、各２時間ずつのプログラムを組んで、学習という枠組みの中で、今の気持ちなどもヒアリングし、相談支援に繋げた。

④に対しては、月に一回程度、様々な体験プログラムを実施。子供達が海やキャンプ、雪や牧場などに体験に行ける機会を提供した。＜成果の概要＞

学習支援、相談支援に関しては、毎回平均７人の子供が参加した。その中で、ASD、ADHD などの診断を受けている子供や不登校の子供も多く存在した。また、その中で兄弟間のストレスや、学校に行けない理由の話などもヒアリングでき、必要に応じて家庭や教育委員会、スクールソーシャルワーカーとの連携も行った。

体験プログラムに関しては、毎回平均７人の子供が参加。様々な体験を通した多世代との交流で高い満足度を得た。また、学校に行けていないが、キャンプや体育館遊びなどには参加したい、と家から出る機会を多く得たり、「不登校」の定義には当てはまらないが、定期的に休んでしまい投稿に苦痛を抱えている子供の受け皿になった。

一方、両方とも目標の数字には届かず、新規の子供とのつながりに対する課題や、不登校生は増えているものの、地域のインフォーマルなリソースと繋げることに対する課題が感じられた。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式３-２等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 （Ａ：人）	平均時間 （Ｂ：時間）	活動量 （ＡｘＢ）	備考・補足・計算根拠等
中学生等	302	4.8	1449.6	
高校生等	146	4.8	700.8	
大学生等	103	3	309	
学習支援員等	78	4	312	
その他				
合　　計				

⑬その他の定量的な数値（任意）

【様式３-２】

令和６年度伴走型就学・学習支援活動助成　実施詳細報告書

奨学活動名：多世代交流型の、切れ目のない学習支援及び社会的体験ができる居場所づくり事業

法人・団体名：一般社団法人えんがお
作成者　氏名：濱野将行

１．取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

＜課題・目的＞
本事業では、４つの課題に向き合った。
①つながりが希薄な世帯、経済的に困難を抱える世帯の学習支援が社会に不足している。
②障害特性のある子どもも多く関わっており、専門職を配置した上での個別性の高い学習支援が必要である。 ③学習面だけではなく、進学・卒業後の伴走支援など切れ目のない支援が重要である。
④学習に加え、安心できる人たちとの課外学習などにより社会的体験の貧困に対するアプローチも重要である。　特に、学習支援の現場では、中学校から高校などに進学する際に悩んでいたり、それを相談できる相手がいなかったりする困り事が 多く聞かれていた。また、進学した後も、例えば通信制の高校で、周囲と違うことに対する負い目やストレスを抱えていたり、日中の 居場所がなかったり、アルバイトをしていく中での悩み事を相談する相手がいない、などの不安を抱える学生が多かった。　そこで、進学に対する相談や、その後の悩みなどを「学習支援」「体験活動」を入り口にしてヒアリングすることで、悩みが深刻化 する前に相談できる環境づくりを目指した。
＜実施内容＞
　①-③に対しては、専門職を配置した学習支援と相談体制を実施した。学習支援・相談支援は、週に２回、各２時間ずつのプログラ ムを組んで、学習という枠組みの中で、今の気持ちなどもヒアリングし、相談支援に繋げた。
　④に対しては、月に一回程度、様々な体験プログラムを実施。子供達が海やキャンプ、雪や牧場などに体験に行ける機会を提供し た。
　学習支援では、特に「斜めの関係」にこだわった。これは、斜めの関係と呼ばれる、家族以外の少し歳の離れた年代との関わりが、 子どもに安心感を与え、発達に良い影響を与えるという学説のもとの取り組みである。当法人の強みを活かし、大学生や若手社会人と の交流を多く持たせた。

２．実施した奨学活動の詳細

・参加人数について、様式 3-1 と同様のものを添付します。

支援対象	延べ人数 （A：人）	平均時間 （B：時間）	活動量 （A x B）
中学生等	302	4.8	1449.6
高校生等	146	4.8	700.8
大学生等	103	3	309

学習支援員等	78	4	312
その他			
合　　計			

①，②，③学習支援、相談支援では、斜めの関係を多く生み出すことを意識しながら、少し年上の年代が教えてくれる場所を目指し た。また、今年度は、前年度助成をいただき活動して得た気づきをもとに、専門職も配置した。その中で、ただ宿題をやるような学習 支援ではなく、本人の特性に応じたボードゲームなども実施した。

これは、例えば学習以前に座っている習慣がない、あるいは漢字が極端に苦手、空間認識が弱く文字が認識されにくいなどのアセス メントに応じて、そういった能力を伸ばす活動をボードゲームで実施する取り組みである。こうした楽しみも交えることで、子どもた ちは、必要な課題や宿題をやりつつ、楽しんで学習に取り組むことができていた。

一方、課題として人が多い時にはフロアーが一辺倒の作りであり、逃げ場が少なかったり、刺激を避けて過ごすことがしにくく、特 性が強い子供へのストレスがかかってしまうことがあった。

④体験プログラムでは、学校に行くことに苦痛を抱えている子供もそうでいない子供も、特性が強い子供や社会的養護下（里親に預 けられているなど）のような子供まで、多くの子どもが様々なことを体験する機会を提供した。

プログラムによって参加者数にばらつきはあったものの、普段経験できない（家庭環境や本人の特性によって）ことが経験でき、高 い満足度を子供や保護者から得ることができた。

大学生と共にカードゲームをする場面

地域高齢者と共にカルタをする場面

・協力者、周知方法

昨年度同様、大田原市のスクールソーシャルワーカー（馬籠清貴氏）、教育委員会、大田原市保育課、NPO 法人子どもの育ちを応援 する会などの方々と連携し、学習支援が必要と思われる学生に対して存在の周知を行った。今年度は特に特性のある子供、不登校の子 供との連携を進め、SSW の馬籠氏とも密に連携した。

一方、インフォーマルサービスとしては地域に定着が十分でなく、参加者を目標まで集めることはできなかった。　・地域活動について

学習支援にきている学生やボランティアとして関わりたい希望する学生と共に、地域の

お祭りの手伝いやイベントのサポートを行っ た。また、地域の高齢者も交えて学習やミニゲームを行い、高齢者から多く声をかけられ、褒められることで子供の自己肯定感の向上 に寄与することを意識した。

・学習支援員、専門職員

学習支援員としては以下の学生が学習支援に携わってくれた。一部昨年度と同様に、かつ新しい人材も交えて進めていった。　（大学院生）山岸亮太（大学４年生）角田隼也、鈴木千夏（大学３年生）斎藤凛（大学１年生）大槻美優（若手社会人）桑久保翔太　　また、専門的知識が必要な学習支援については、作業療法士、言語聴覚士、放課後指導員、保育士、看護師などの専門職が、子供一 人一人をアセスメントし、そのアセスメントに基づいて学習支援を実施した。こうした手厚い支援ができたのは、本助成金を活用できたからである。

体験プログラム　田植え

体験プログラム、キャンプ

３．本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

本助成では、大きく２つの気づきがあった。

１つ目は、特性のある子供の抱えている困りごとに対する適切なアプローチが、インフォーマルサービスには大きくかけている、 ということである。昨今、不登校生や貧困層への学習支援は多く存在する。一方で、そうした学習支援はボランティアが基本であり、 必ずしも専門的知識があるわけではない。しかし、不登校生や貧困層の子供の中には一定数発達に課題を抱えている子どもがいる。下 肢・体幹の筋肉が未発達で座っていられなかったり、空間認識が弱く文字が頭に入りにくかったりすることもある。　　こうした子どもに一方的に学習を促しても、学習能力は身につきにくい。必要な筋肉や機能を鍛える専門的訓練が必要である。学校 に行けない子どもなどに対する受け皿は今後も増えていくが、そこにはセットで専門職がいないと、ややもすれば、子どもに誤った支 援をしてしまう可能性もあり、そうしたリスクに改めて気付かされた。

２つ目は、体験の貧困格差が非常に大きくなっている点である。これは、不登校生が増えたり、家庭環境が複雑な子どもが増えた結　果だと考えられる。こうした社会背景に対して、やはり各地域に様々な世代と一緒に過ごし、多くのことが経験できる環境が必要であ　ると感じた。活動内容は決して特殊である必要はなく、川遊びや大きな公園、地元の有名な場所への訪問で十分だが、そうしたことを　経験しておくことと、その中で多様な人とであることが重要である。ある子供は、母親以外との接点がほぼなく、他者に対する想像

力、社会性などが極端に低かった。しかし、専門職間でアセスメントを進めると、特段特性が強いわけではなく、他者との関わりの総 量が低い、という後天的な原因であった。

こうした地域課題に多く触れつつも、2年間助成をいただき活動した上での反省点としては「インフォーマルサービスの地域認知 度」である。公的機関ではないため、公的機関と連携して動いていっても、保護者が安心して子供を任せてもらえるまでには時間がか かってしまった。

助成金をいただいて事業を行っているみとして、行政機関との連携に力を入れ、もっと受益者数を増やしていくべきであった。 ＜今後の発展性＞本事業で行った学習支援、体験プログラムは、収益性は低いものの、法人の自主事業である「学童保育」や「放課後 等デイサービス」につながるプログラムである。また、助成期間でわかった通り、このニーズは非常に大きい。そのため、ニーズがあ り、収益性は低いが法人の自主事業の顧客となる可能性が高い事業として今後は自費で継続していく。

４．本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

本事業の中で、多くの出会いがあった。その中でも印象に残ったものの一つが、高齢者との関わりで心を開いてくれた小学生であ る。興奮した時に手が出てしまうため、無料学習支援の他の教室に行けなくなった児童だったが、その子自身が実は家庭で暴力を受け ていた。児童相談所の介入時期もあったものの、現在は在宅で生活している。しかし、本人にとっては常に警戒体制でいなければいけ ない環境であった。そうした環境は、本人に意図せずして暴力的な側面を引き出してしまう。

そのようなエピソードの児童は、最初は学習にも取り組みにくく、会話も続かなかった。しかし、ある女性の高齢者が笑顔で話しか け続け、本人は笑顔で会話するようになった。この児童は、現在も継続的に学習に来ている。

先述の通り、今後は無料の学習塾などのインフォーマルサービスの役割が増える。その役割は、無料でいながらも「専門職の知識 が必要である」という非常に難易度の高いものである。こうした背景を考えると、本助成金は非常に意義深く、今後もぜひ多くの団 体・現場を支援していただきたいと感じた。

５．学識者からのご意見、コメント、等（申請カテゴリーにて「S」が付されている団体）